

## 第5章 「震災後」をどう生きるか



全国から集った「てらネット」の学生たち（会津若松にて）

### 高潔な被災

早稲田大学文化構想学部4年 谷田部 亜希

地震が起きた時、私はちょうど家の自室にいました。揺れが長いことに気づき、普段の地震と違うと感じ、窓を開けたり物が落ちそうなところから離れて揺れが収まるのを待ちました。その後、TVで震度を確認した時はいつもより大きかったのだと思うくらいでした。しかし、津波が押し寄せる映像、波に家が燃えながら流されて他の家も巻き込んでい

く様子を見て、現実感が薄れていきました。まるで、映画の一場面のように感じていました。地震から一週間ほどは、あまりに大きな被害や、原発事故により被害が悪化していく状況に漠然とした不安を感じながらずっとTVの地震報道を見ていました。あれほどTVを見続けたのは初めてでした。直接被害はなかった私を感じたのとは比べ物にならない恐怖や不安を被災地の方々は感じ続けていることと思います。

しかし、秩序を保ち、大変な状況を耐え忍ぶ東北の方々の姿は、海外のニュースで日本

人の驚くべき美德と称賛されています。日本国内でも、困難を耐えて行く東北を誇り、少しでもその助けにしたいと義援金やボランティアなどの支援が集まっています。確かに被災した方々に対しては、そのがまん強さは称賛に値すると思います。しかし、被災した方々のこのような忍耐強い姿勢を、高潔なものとして称える風潮は、被災した方々の本心を押しこめ、表面化しにくくさせるのではないのでしょうか。東北の方々は耐え忍ぶ人たちだとステレオタイプ化されてしまうと、少し多くの要求が出てくれば、わがまま・ぜいたくと受け取られる可能性があります。また被災地の忍耐を高潔なものとして尊び、見習わなくてはという気持ちが強まりすぎると行き過ぎた自粛行動にもつながりかねません。

さらに、大人はがまんならなくなれば口に出して主張することもできますが、子どもの気持ちをくみ上げるのはより難しいでしょう。自分の抱えるつらさや要望を言葉にできないような小さな子たちも被災地には多くいます。避難所では被災地の子どもたちがお年寄りにかたもみをして、癒しになっているというニュースがありました。このように子どもたちはいるだけで周りを癒し、被災地の未来を支える明るい希望となりえますが、見た目には明るく可愛い子供たちへのケアが欠けているように感じます。子どもは明るく元気なもの、被災のダメージも吹き飛ばすはずとは考えず、子どもたちの恐怖心や不安をちゃんと表に出させて、消化し乗り越えられるようなケアが必要であるはずで

またボランティアに対しても、無私・奉仕の精神が強く求められ、高潔なものにとえられがちだと思います。私自身、ボランティアは気軽に手を出してはいけないもののように感じていました。やるなら覚悟が要るものというイメージがありました。被災地に入る際には、食や寝床は自力でまかない、被災地に迷惑をかけないようにするというのは確かに当然のことです。

しかし、それにプラスして被災地支援を第一に考え、物見遊山的な気持ちは持つてはいけないという精神面もボランティアには求められているように思います。被災地が今どうなっているのか見てみたい、学生が社会経験や進学・就職活動の一環で、といった理由でボランティアに参加するのは不謹慎でしょうか。現地で真剣にしっかり働ければ、当初は不純に取られかねない動機が混じっていてもいいのではないのでしょうか。

また、ボランティアに対する高潔なイメージは特にボランティアに参加する（したい）側に強いように思います。ボランティアに参加してみたくても、以上のようなイメージから、自分にできるのか不安になってしまいます。ボランティアを素晴らしいことと思う程、参加のハードルが上がって行ってしまいます。はじめは気楽に参加することはできないのかと疑問に感じます。

震災から4ヶ月以上が経ち、直後よりも被災地の状況がメディアで流れることは減ってきました。実際に状況を目にする機会が無いと、何だかとても大変なことになって頑張っ

ている東北という印象だけになり、日々の節電や自分に直接影響があるニュースにばかり気をとられます。何だか頑張っている遠くの東北ではなく、自分につながるものとして被災地の出来事をとらえるよう覚悟をする必要があるのでしょうか。被災した方々や子どもたち、ボランティアを高潔なものと考えすぎず、奇跡の復興がなされるのを待つのではなく、実害を被っていない地域では難しいことですが、自分も関係していることと認識する必要がありますと思います。

**3月11日**

早稲田大学社会科学部4年 八巻 太郎

3月11日の夕方から、僕はバイトが入っていたため、原付に乗ってお店がある藤沢駅に向け出発した。原付でも片道30分程かかるため、電車で行く方法もあったが、節約のためにいつもバイト先までは原付で行っている。

震災当日は藤沢市内では停電はなく、お店も普段通り営業していた。しかし、店内の雰囲気はどこかいつもと違うようだった。そう、お客さんの層が違っていただ。普段は早い時間帯には高校生や大学生など若いお客さんが多いのだが、この日は電車が関東各地で運休になっていたため、いわゆる「帰宅難民」のサラリーマンらしき人が居場所を求め、大勢来店してきたのだ。

僕が務めているお店は朝6時まで営業しているため、帰宅できずに藤沢駅周辺をさ迷っ

ていた人たちが続々とやってきたらしい。お店としては繁盛して嬉しいのだが、実は電車が運休した影響で店員の中にも藤沢に着けない人がいたのだ。普段は少し対応が遅れたりするとクレームをつけてくるお客さんも中にはいたりするのだが、この日のお客さんたちは事情を察してくれたのか、催促するようなクレームはなく、むしろ「こんな時にバイトなんて大変だな」など、声をかけてくれる人もいた。

更には、オーダーを受けていると、「君の家族は無事だった？」や「今の電車の状態わかる？」など普段と比べてお客さんからたくさん話しかけられた。他にも店内からは電車の運行状況や「被害者は何名だ！」「何kmまで津波が来たらしい」といった会話が絶えず聞こえてきてきた。バイト中だったために携帯やテレビを見ることができなかった僕でも、ある程度の近況を把握することができた。

余震もまだまだ続いていたので、揺れるたびにお客さんは不安な声を上げていた。それに加え、お店の建物は結構年季が入っていて、もしかしたら崩れるのではないかと僕は心配していた。

お客さんの中には東京に出かけていて、東海道線を使って帰宅途中に地震に遭い、藤沢駅の少し手前で降されてしまったという人もいた。そのお客さんは一人でお店に来ていたのだが、お会計の時に「俺の家は静岡のすっごく奥の方なんだけど、電車が停まっちゃって仕方なくここで降りたのよ。藤沢なんて一度も来たことなかったのにさ…けど美味かつ

たよ。また何かあって藤沢寄ったらこのお店来るから！」と言ってお客さんは出て行った。漫喫に行くらしい。

普段のバイト中にも話しかけてくるお客さんは結構いるし、「ありがとう」や「美味しかった」と言われることも結構ある。そういう言葉は何度言われても嬉しい。しかし、あの日に言われた言葉は特別だった気がする。言葉では上手く表現できないけれど、すごくほっとした。

藤沢市内では地震の影響で人が死亡するような被害は何もなかった。僕にとっては、福島や宮城といった近いようで遠い地が地震や津波でとても大きな被害を受けていることは知っていたが、現地にいるわけでも、地震で停まった電車の中に閉じ込められたわけでもない。地震の後も結構普段通りに生活して、夕飯を軽く食べて、原付乗ってバイト先に向かって24時まで働いたら帰宅する。そんないつも通りの春休みの一日を送っていたつもりでいたが、心の中には大きな不安があったのかもしれない。

震災当日は被害の状況が今のようにはっきり分かっていたわけではなく、どんなことが起きているのか、また、これからどうなっていくのかまだわかっていなかった3月11日のあの夜だからこそ、不安だったのかもしれない。その不安な心を、静岡に帰れなくなってしまったお客さんの暖かい言葉が和らげてくれたのかもしれない。あの日はそんな力のある言葉に出会えたと感じる事ができる一日だった。

被災された方々も心に大きな不安を抱えていて、意識的でなくともその不安を和らげてくれる何かを求めているのだと思う。それは例えば近所同士の助け合いだったり、自衛隊の救助・復興活動だったり、様々な地域から訪れてくるボランティアだったり、形は色々ある。

僕は東日本大震災が起きてから被災した方のために何の救援もボランティア活動もしていないので、何を言っても外野からのきれいごとになってしまうが、しかし今回の震災に限らず、どんな時でも、人が抱える不安な気持ちを少しでも軽くする・和らげることは大切である。本当に忘れてはいけないことは、他人を元気づけることは難しく、傷つけることは簡単なので、こういった緊急事態にいかんにか人を元気づけるかを考えるべきであるということだ。

### 3.11 の影響

早稲田大学社会科学部3年 崎原 真理子

3月11日の前、地震が起こった3月11日、その直後について振り返り、そして今現在の自分について考えてみようと思う。

2月2日に私は試験が終わり、そこから私は春休みを満喫していた。遊びに、アルバイトに、サークルの練習・合宿などで充実していた。3月にあのような大規模の地震が起こるなど、全く考えもしなかった。

3月11日の金曜日、私は久しぶりに中学時

代の友人3人と遊びに出かけていた。その日は、埼玉県大宮にあるスイーツパラダイスに行った。制限時間70分でスイーツやパスタ、カレーライス、スープなどを食べ放題できる店だ。もうそろそろ終了時刻、というところに地震は起きた。始めはすぐに治まるだろうと思いい友人とそのまま話していると、揺れは激しくなる一方で周りのお客さんたちも机の下にもぐり始め、私たちも下にもぐった。そのときの状況は、机の食器がどんどん落ちて割れ、スープをかぶったり、チョコファウンテンのチョコレートが周りに飛び散っていたりというような感じだった。

その日のお客さんには女子高生も多く、彼女たちは叫んでいたため余計に恐怖があおられた。スイーツパラダイスは7階にあったため、揺れも結構大きかった。揺れている中、私は何度も「とまって」と念じた。しばらくして揺れが落ち着いたところに避難経路の階段を使ったが、壁が崩れていたりひびが入っていたりして怖くなった。外に出ると街路樹が風で揺れているのではなく、地震で揺れていることが見てわかった。そして大宮駅からのアナウンスが聞こえ、電車は全線停止だとわかったため地元の最寄り駅に向かって歩くことにした。

結局、友人のお父さんが車で迎えに来られるということで送っていただいて、21時ごろには無事に家に着くことができた。地震が起きた直後すぐにしたことは、家族などの安否確認だ。あのときは携帯電話がなかなかつながらず焦り、不安でいっぱいになったことを

覚えている。公衆電話や携帯電話などが使えないと誰とも連絡がとれないことに気がつくことができた。

これは当たり前のことだが、普段どれだけのさまざまな通信手段に頼っているのかが思い知らされた。また、あとから考えてみると、心配する相手がいることや自分を心配してくれる人がいることは、ありがたくとても幸せなこと私は感じた。私たちは、いつ死んでもおかしくない環境で生活している。交通事故に遭うかもしれないし、天災に見舞われるかもしれないし、急に病気にかかるかもしれない。地震の直後には、日常での出来事、人とのかかわり方を見直し大切にしようという意識が高まった。

地震が起きて数日たつと、どのスーパーもコンビニも品薄状態になった。私はトイレットペーパーを探しにいくつものスーパーや薬局を回ったが、どこも品切れだったことがよくあった。そのころは、遊びの予定もサークルの練習も中止、アルバイト先も営業時間を削減していた。運休していた電車も少しずつ回復していたが、お花見なども自粛モードでしばらく遠出はしなかった。ほとんど身動きできなかったため、不謹慎かもしれないが正直なところ暇としか言いようがなかった。

関東地方の内陸の方は、福島県などと違って震災の被害があまりなかったため、通常の生活に戻るまでが早かった。確か3月の後半には、すでに電車に乗って出かけていて、サークル活動のように中止になっていたものも徐々に再開していた。

現在は、余震がまだ起こっている状態だ。今生活している中で、私が特に気をつけていることは節電だ。今までより電気のつけっぱなし等に敏感になるようになった。家ではクーラーがもう5年ほど故障しているため、扇風機のみで暮らしている。これは自ら進んで始めたことではないが、結果的に環境にも社会にも、健康にも家計にもよい影響を与えていると思う。バイト先でも、冷房の温度は28度設定で、電気も一部消灯して営業している。たまにものすごく寒いスーパーがあるが、それはよいのだろうかと疑問に思う。節電を意識してみると、日常生活で無駄は大量にあることを改めて実感した。それは電気以外のことについても言えるだろう。

阪神淡路大震災があった1995年、私は大阪に住んでいた。幸いなことに、私が住んでいた地域はあまり揺れなかったらしい。そのころ4歳だったため、布団の中でずっとビーズで遊んでいたという記憶ぐらいしかない。しかし、地震への恐怖心は人より少し強いのではないかと感じている。

4歳のときと違って、今回の3月11日の地震では多くのことを考えさせられた。原発についても今まで考えたことはなかったが、チェルノブイリ事故についての資料も読んで調べてみた。3月11日のことや、そこから考えたことはこれから忘れないだろうし、忘れたくない出来事である。

## 震災に見る日本人

早稲田大学社会科学部4年 山崎 耕平

東日本大震災の死者は7月31日の警察庁のまとめで、1万5650人、行方不明者は6県で4977人となった。原発の問題、エネルギー問題、農畜産物汚染の問題、被災者の労働・住宅問題、震災孤児の問題など、震災から4カ月以上も経った今もなお、日本は「災害」のさなかにある。

今私たちが最優先に考えるべきことは、こうした現実の問題をいかに解決すべきか、ということである。しかし一方で別の視点から見るとき今回の震災は、日本人の「日本人らしさ」が際立って表出する出来事にもなった。

### 震災における日本人の行動の背景とは

東日本大震災における日本人の行動や態度が世界中で称賛されたのは有名である。以下は海外のメディアによる評価である。

『「商店の襲撃や救援物資の奪い合いが見られず、市民が苦境に耐えていたことに感嘆」「日本の人々には真に高貴な忍耐力と克己心がある」(NYタイムズ)』

『「他の国ではこんなに正しい行動はとれないだろう。日本人は文化的に感情を抑制する力がある」(BBCワールドニュース)』

【J-CAST ニュースより】

海外の日本に対する称賛・驚きの対象を 3

点にまとめると、日本人の①「震災に対する平常心」②「他者への思いやり」③「秩序・規律の維持」である。

この3点はあくまでも、国民全体を平均的に見た場合の、外国との比較であり、実際には日本でも個々の現場で様々な混乱は当然生じている。

しかし、世界中の各国が自国の災害事例—例えば2005年、米国におけるハリケーン・カトリーナ。各地で略奪・窃盗の報告が多数発生した—との比較をした上で、共通に言及していることからすれば、この【平常心】【思いやり】【規律】は日本人の特質と捉えることもできるだろう。

ではこうした「日本人らしさ」の背景にはいったい何があるのだろうか。先に挙げた3点について述べる。

### 「震災に対する平常心」

和辻哲郎氏は著書『風土—人間学的考察』の中で、世界の風土を、気候や自然との関わり方と関連づけて類型化している。この類型上では日本はモンスーン型風土にあたる。欧米の自然を「支配する」という自然観とは正反対に、この風土のもと、日本人は自然に対して「受容的」であり「忍従的」とであると氏は述べている。

元来日本は農耕社会を築いてきた。モンスーン（季節風）によってもたらされる豊かな雨は様々な動植物を繁殖させて豊かな自然の恵みをもたらした。その一方で自然はときに猛威をふるい農作物や住居をいとも簡単に奪

っていくことも日本人は知っていた。

そこで日本人が身につけたものは「自然に感謝し、受け入れ、ときにはあきらめて耐え忍ぶことを繰り返して、自然とともに生きる」ことだった。

もしも海外の人々の目に、災害を前にした日本人が平静を保っているように映るのならば、それは自然との伝統的な付き合い方なのかで育まれてきた「日本人の血」とも言えるのである。

### 「他者への思いやり」と「秩序・規律の維持」

被災地で救助隊員によって瓦礫の下から助けられた老婦人が最初に発した言葉は「すみませんね。」だった。

都内で帰宅難民となり地下道で一夜を過ごす人々は皆、人が通り抜けるスペースを確保していた。救援物資の受け取りを待つ人々は整然とした列を作っていた。

こういった一つ一つのエピソードに海外は驚いた。なかでも熱烈に日本人に称賛を与えたのは中国人だった。モンスーン型風土、仏教・儒教と共通点を多く持つ中国にこれほどに称賛されるからには、日本人固有の背景があるはずである。

それは「島国」という特質ではないかと思われる。中国や欧米、その他地球上の大部分の地域は陸続きの環境にある。そのため太古から領土や富を求めた民族間の争いが絶え間なく起こった。略奪・競争の歴史のなかで「自分のものは自分で手に入れる・守る」「自己主

張をする」風土が醸成されていった。自らの手で独立を勝ち取ったアメリカに個人主義礼賛の傾向があると言われるのも同様である。

一方、周囲を海に囲まれた日本は、歴史上、外敵の襲来が特別に少なかったと言われる。そのなかで人々の意識は内に向けられ、仲間同士のコミュニティが重要視される。コミュニティのなかでは、調和を維持するため利他的・協調的であることが最大の美德とされた。まさに「和」の精神である。

しかし、これは「個人の利益を優先することは許されず、コミュニティからの逸脱者とみなされる『恥』を人々が恐れる社会」をも意味し、両者は表裏一体の関係である。

今回の震災においても、先に挙げたエピソードを表とするならば、裏もやはりある。被災を免れるために海外に住むことを考えた被災地住人に対して、批判的な意見が多くみられたようだ。

個人の責任・判断で自分の身を守らねばならないという意識の強い欧米人から見たとき、それは「村八分」と映るのであろう。

表も裏も含めて、【思いやり】と【規律】はこうした共同体のなかで生きてきた日本人ならではの態度の現れだと見ることができる。

## おわりに

ここまで、今回の震災を通して浮かび上がった「日本人らしさ」を海外の目を通して提示し、その背景を説明してきた。

しかし、その説明は現代日本人を考えたとき、必ずしも正確ではない。ことさら【思い

やり】と【規律】に関して、その背景として説明した島国ならではのコミュニティの存在という前提が崩れ始めているからだ。海外がその規律正しさを称賛する今回の震災においても、事実略奪は発生していた。この事実とコミュニティの崩壊を直接結びつけることは安易にはできない。

しかし、略奪などが他国の例よりも圧倒的に少なかった事実は、日本人である自分の感覚と照らし合わせても、やはり先に説明した背景との結びつきは深いのではないかと思う。地域コミュニティが崩れかけながらも、歴史的に養われたその精神は今も「まだ」消えずに残っている。

震災の経験をする前と後において日本はエネルギー、安全管理などの分野で変化していくはずだ。その変化のなかには、コミュニティの再構築という言葉も並ぶ必要があるだろう。そしてこれらの変化を推進する中心となるのは、自分たち若者世代なのである。

## <参考文献>

- ・J-CAST ニュース<<http://www.j-cast.com/>>
- ・和辻哲郎『風土—人間学的考察』岩波文庫、1979年



## 3.11 以後の私

早稲田大学社会科学部4年 前里 美奈子

### 震災発生時の私

3月11日、東日本大震災が発生。東北では宮城、岩手、福島を中心に多くの犠牲者が、また東京でも震災による犠牲者がでた。

この日私は何をしていたのか、その日のことを4カ月たった今でも覚えている。その時期私は、就職試験の勉強で毎日塾に通っていた。その日もいつもと同じように塾へ行き、午前中勉強し、午後からも勉強する予定であった。しかし、塾についてからノートがなくなっていることに気付く。そのノートは、自分で要点をきれいにまとめた一番大事なものであったので、そわそわした私は家にノートを探しに帰ったのであった。そして、家に着いて15分後に地震がきたのである。

今まで大きな地震を体験したことがなかった私は、揺れ始めたとき「死」を考えてしまい、揺れている最中母に電話した。今までにない恐怖感に襲われていたのを今でもはっきり覚えている。結局、その大事なノートは今でも見つからないが、私はそのノートに守られたのだと今では思っている。

地震が発生した直後テレビをつけてみると、映画にでてくるような映像が目に飛び込んできた。原発が爆発する映像、火災の映像、そして最も衝撃的だったのが、津波の映像である。こんなことが日本で起きているのか、本当に信じられなかった。

### 震災発生後の私

震災発生次の日、テレビではどの局でも震災の中継をやっていた。余震が何度も発生する中で、テレビは情報収集のためつけていなくてはならなかった。しかし、何度も繰り返し震災の映像を見るたびに、自分自身も気分が落ちてうつになりそうになった。さらに、テレビでどんどん犠牲者の数が増えていくのを見て、本当に心が痛み、これから日本はどうなるのだろうと不安でいっぱいだった。でも、被災地の人には家族や知人を失ったり、家を失ったり、たくさんつらい思いをしている。

また、これから生きていく上でも、津波を見た人はトラウマになっていると思う。被災地の人を考えると、私たちはどうなんだろう、何ができるのだろう、どう生きていったらいいのだろう、と考えるようになった。

震災発生時、都心では電車が止まり、帰宅困難者が多く発生し、電話もつながらない状態が続き、混乱に陥っていた。そして、都心でいつ直下型地震が発生してもおかしくないと言われるなか、すごく不安を感じた。

震災発生後、私は「生きる」について考えることが多くなった。今まで生きてることが当たり前で、「死」についてそれほど考えたことはなかった。でも、震災があって、多くの犠牲者がでている状況の中で、人間はいつ死んでもおかしくない、「死」と隣合わせなんだと思った。私は毎日を普通に生きている、ただその中には目標をもって努力したり、いろんな人との出会いがあったりと、充実した

毎日を送っているつもりである。それは今でも変わらない。

ただ震災後私の中で変わったのは、つらいことがあってもあまり気にしなくなったことである。それまでの私は、つらいことがあるとそのときはとことん落ちて、次の日から笑って過ごすことで乗り切っていた。でも今は、このことに加え、生きていることへの感謝の気持ちを持つようになった。つらい思いをすることができるということは、生きているということ。勉強なんてもうしたくない、と思っても、勉強したくてもできない人もいるし、勉強ができる環境にいることだけで幸せだと思えるようになった。

そして、今回の震災で一番感じたのが人のつながりである。東北の人はいまだに避難所生活をしていたり、大事な人をなくしたり、つらい毎日を送っているけど、頑張っって前を向いて生きているのは、人と人との支え合いがあると思う。まさに人は一人では生きていけないという言葉通りである。

東京では、人のつながりの希薄化という問題がある。地域の密着もなくなってきている。人口が流動化する東京で人とのつながりをつくっていくことは難しい。私は今公務員を目指しているけど、もともとは人が好きでなりたいたいと思っていたが、「てらこや」の活動に参加したり、今回の震災を体験して、地域のつながりをつくっていくような仕事に携わったり、そういった活動をサポートしていきけるような仕事に携わりたいと思うようになった。

今後いつ震災が起こってもおかしくない状

況で、人が支え合っていくことができるような社会にしていかなければならない。その際に、地域での居場所づくりはとても大事になると思う。

このように、震災を通して、私は「生きる」こと、「人のつながり」を考えるようになった。これらの考えたことを、今後生きる上でもっと考えていきたいと思う。

## 東日本大震災で感じたこと

早稲田大学社会科学部3年 村井 妙

この度の地震で被災された方々にお見舞いを申し上げますとともに、お亡くなりになられた方々には心よりお悔やみ申し上げたい。

正直に言うと、私はこの未曾有の大災害について正面から考えることのできていない日本人の一人だと思う。実際地震の被害は受けていないし、被災地にボランティアに行ったわけでもない。幸か不幸か、地震の被害の生々しさを直接感じておらず、節電などの日常生活にささいな影響が出ただけで、おおまかなことが元に戻ればまた震災前となんら変わらず何不自由なく暮らしている人間である。学校生活もアルバイトも大して変化もなく、いつものようにめまぐるしく過ぎていくので、あんな大震災が起きたことすら忘れてしまう瞬間もある。

もちろんたくさんの方がつらい思いをしているだろうなあとか、早く復興できたらいい

なあ、東北頑張れ！ぐらいの誰でも考えていることは思っているが、やはりどこか傍観者なのである。

しかしその裏では、1万人の人が亡くなり、今もなお行方不明なのだ。自分の周りでは被害を受けた人は本当にいないから被災地と少しでも距離があればそこまで多くの人の命が奪われたとは想像もできず、遠い国で起こったことのように受け止めることから若干逃げているという気もする。自分がそうであるからあまり人のことは言えないけれど、そんなふうに感じている人も少なくないのではないかと思う。

さすがに日本国民全員が被災地の人たちと同じ気持ちになれるわけではないが、忘れることはできない事実として私たちは目をそらさずに考えなければいけない。私がこのままの感情で終わらないためにも、たとえ地震についてほとんど知らなくてもこのテーマにしようと思った。

東京では今はすっかり元の生活に戻ったけれど、私も地震が起きた頃は今のような地震前とあまり変わらない生活ができるなんて思えなかった。テレビで見る津波の映像も信じられなかった。

そのときはサークルの合宿で群馬県にいて、宿のテレビからしか入ってくる情報がなかったのだから、とにかく大変なことが起きているということしか分からなかった。ニュースの情報ではどんどん死者が増えていき、流れる映像も街だったところが海になっていて、日本

で起きている出来事だとは信じ難かった。

本当に良かったと思えることは、地震が起きたとき一人ではなく、サークルで約40人の人と行動していたので、あの映像を一人で見ると、余震が起きたときに一人で不安になるということではなく過ごすことができたことである。一人だったら本当にもっと恐い思いをしたのではないかと思う。その日早朝に起きた別の地震も大きかったがもしも一人だったらただただ恐くて、またいつ起こるか分からない地震におびえていただろう。

また幸いなことに40人の仲間の安否が分かったわけだから、大きな不安もなく運が良かったと思う。そのときはちょうどスキーの大会で群馬に来ていて地震の次の日は大会最終日だった。最終日は団体種目で、その結果により優勝が決まる大事な日だったのだが、地震の影響で中止になってしまった。選手である先輩たちはこれが最後の大会なので、この日を思っずっと練習していたがそれを披露する機会もなくなってしまった。中止になったと聞いて先輩たちはみんな泣いていた。

私も残念だとは思ったが、正直泣けなかった。もちろん自分は選手ではなく来年できるから先輩たちがかける思いとはまた違っているけれど、前日に無数の車が津波に押し流されている映像を見て、自分たちが最終競技までできなくてつらいとは思えなかったのである。頑張ってきた練習の成果を披露できて毎年感動する大会なのだが、その感動というのは安全な環境のなかで当たり前なのが当たり前前にできるという条件のうえにあると思う。

多くの命が犠牲になり、危険にさらされているという状況のなかで今までと同じ気持ちでものごとを考えられるかという、そうではないはずである。自分たちがいかに恵まれた条件のなかで生きてきたかということを思い知った。私たちが今まで積み上げてきたものはすべてその条件があってこそのものであるから、揺るぎないものだと思っていなくても想定外の出来事が起こってしまえば、こんなにも脆く崩れてしまうのだなあと思った。

しかし、被災地の人々は常識が通じないほどのこの災害の中で大きな混乱も出さずに毎日をしっかり生きている。そこには想像できないほどの苦労があると思う。私は恐いと思っても、結局自分自身のことしか考えてなくて、自分の生活が普段通りになれば、震災のことを忘れかけてしまうのだ。

人間は自然の前ではちっぽけで無力な存在であり、人間の思想だとか正義だとかは簡単に吹き飛ばされてしまう。しかし生きていれば一度吹き飛ばされたものでももう一度立て直すことはできるのだ。まだ実現できてはいないが、そんな気持ちを持ってこれからもっと被災地のために自分のできることを見つけていきたいと思う。

## 東日本大震災による 価値観の変容について

早稲田大学社会科学部4年 甲斐 大輔

3月11日に起きたこのたびの東日本大震災は、被災地に甚大な被害をもたらし、日本だけでなく海外の国々にも物理的、精神的に様々な分野で多大なる影響を与えた。

私自身、大地震の揺れを東京駅付近で体感した。大地震といえば私がこの世に生を受けてから国内外問わずいくつか起こっており、そのたびに世の中を騒がせていたイメージがあるが、私は今回の東日本大震災が、世間的にそれまでの震災とは一味違うものを感じられてならなかった。

東日本大震災が起こって早4ヶ月が過ぎ、事あるごとに大震災の事やそれにまつわる事に触れたり考えたりしてきた。それらを踏まえてこの機会に改めて、今回の東日本大震災がなぜ特別なものを感じられたのかを分析し、そこから得られる社会的な影響をみていきたいと思う。

特別に感じた理由としてまず初めに、あれだけの規模の地震を実際に多くの人が体感した、ということが挙げられる。

就職活動のために東京駅付近のカフェにいた私は、周りの人がパニックになってビルの外に駆け出していく姿を見、私も外に避難する際に高層ビルが大きく左右に振れている状態を見た。実は東日本大震災が起こる前に、スマトラ島やニュージーランドでも大規模な

地震は起きており、日本でも報道は頻繁にされていた。しかし、それらの報道を他人事のように捉えていることに、今回の地震を体感して初めて気付かされた人は多いのではないだろうか。私自身もそうであったが、距離は離れていれども当時の被災者に対して、大した感情や思考を持てていなかった自分自身にショックを受けた事を覚えている。

それと加えて、これまでの震災と今回の震災を隔てる最も大きな要因となったものは、情報の量や質がこれまでと比べ向上した事なのではないかと考える。そしてその一翼は新しいメディアが担っていると思う。

大震災では良くも悪くも新たなメディアが大活躍した。ここでいう新たなメディアとは、近年登場した Facebook や mixi などの「ソーシャルネットワークサービス」と呼ばれるもの、twitter や tumblr などの「ミニブログ」、Ustream や YOUTUBE などの「動画共有サービス」などのことである。これらのメディアを利用して、在京キー局が情報発信を行ったり、政府が被災地の要望に答えたりしたことも事実としてあった。

気付けば私自身、余震が収まらない今でも、地震の情報はテレビやラジオなどの既存のメディアではなく上記のメディアで確認する癖ができています。それはテレビやラジオを私が所持していないという理由よりも、情報の取得速度が既存のメディアと比較して速く感じることと、より“真実”に近い情報が得られると思っているからだ。

新しく登場したメディアはその性質からそ

れぞれが得たい情報を見つけやすい仕様になっており、今問題となっているスポンサー等によるバイアスのようなものもかかりにくい。その代わりその情報が真実か否かを判断するのはそのメディアを利用する側に委ねられている。何が正しくて何が間違った情報なのかを自分自身で見極める事が前提としてあり、その事を大部分のユーザーが認識している。

昨今では「ユビキタス社会」という用語が叫ばれ、このようなメディアも登場し利用者数も増加してきたが、そのおかげで人々はより臨場感を持って今回の東日本大震災を受けとめている感触を持つ。以下新聞記事を引用する。

ハンマーで指輪破壊の「離婚式」、震災で問い合わせ3倍に  
東北を中心に甚大な被害をもたらした東日本大震災は、夫婦生活にも影響を及ぼしているようだ。結婚指輪をハンマーで壊す儀式「離婚式」の問い合わせが、震災前の約3倍に上っている。

13年間連れ添った夫婦が都内で3日、離婚届提出の前日に離婚式を挙げた。2人は互いにハンマーを握り合い、最後の共同作業として結婚指輪をたたきつぶした。この夫婦は大震災を機に人生の価値観を再考した結果、離婚を決意したという。

離婚式プランナーの寺井広樹さんは、離婚式への問い合わせが急増している理由について、震災が人生の優先順位を今一度考え直させ、そこで夫婦が価値観の相違に気付くためではないかと話した。

[2011.7.4「ロイター」より引用]

上記の記事にある通り、3.11 やそれをめぐ

る出来事により、自身の今の状況やこれからの生き方等を見直すきっかけを得た人は少なくないのではないだろうか。

上記の新聞記事に加え、最近私の周りでも震災によって自分を見つめ直す人が増えたと感じることもある。私は現在、世でいう就職活動の時期にあたるため、就職活動をしている友人とよく話すのだが、中には震災を機に就職活動をぱったりやめた人や、震災前に進路が決まりそこへ進む予定だったが思い直し、もう一度一からやり直すという友人もいた。

今回の地震を実際に体感した人は相当数存在しており、実際に体感していなくても様々な情報源から臨場感の伴った情報を受け取った。それによりそれぞれが大震災そのものだけでなく、それに付随する様々な事象から、世の中や自分を顧みるきっかけを得、上記の記事のように社会的な立場や評判よりも、自分の人生をより価値あるものにしていこう、という機運が高まり広まったのではないだろうかと私は感じている。

### 3.11 東日本大震災を経験して

早稲田大学社会科学部3年 宮地 裕子

3月11日14時46分、私は自宅のリビングでうたた寝をしていました。緩やかな揺れを感じて地震かなと思った途端、ぐらっと床が揺れ出し今まで体験したことのない大きな揺れを感じました。いつものようにすぐに収まるだろうと思っていたけど、なかなか終わ

りません。段々揺れが大きくなるような感じがして、一瞬恐怖を感じました。でも、今までで一番大きな地震の揺れ、小学生のころ地震車で体験したのと同じくらいの揺れを感じて、途中からはなにかのアトラクションに乗っているような楽しい感覚になっていました。テレビが倒れないように、食器棚から食器が飛び出さないように必死に抑えて、長い地震は過ぎて行きました。

家族と「大きかったね、長かったね、震源地はどこだろう」と呑気にテレビをつけると、大騒ぎでした。各局が関東近郊の地震の被害状況を伝え東北支部放送に切り替わり、建物の崩壊や列車の運行状況、停電地域、震源地、マグニチュード、津波の予想・・・誰もが慌てふためいていました。そんな状況でしたが、私は夕方から2カ月も待った高校の友達と会う約束があり、電車の再開を心配していました。みんなと連絡を取ろうと思っても「繋がらない・送れない・返ってこない」のでmixiで安否確認や約束の延期などのやりとりをしました。

そんな時間も、テレビでは東北の地震被害や港が溢れている様子や沿岸部の町に津波が浸入していく様子を伝えていましたが、まさかこれから何千人もの人が亡くなるなんて考えもしなかったし、こうしてテレビに映っている津波の下に飲まれている人がいるなんて全く思いませんでした。津波が町を侵攻していく映像を見て「みんな逃げて一あの車危ない飲まれそう」と映画を見るように危機感を抱かずに実況していました。そして私は地震

報道しかしないテレビに飽きて DVD を見始めました。見終わって普通のチャンネルに戻したとき、私は目に入ったニュースに衝撃を受け、言葉を失いました。その時漸く、大変ことが起こったと状況を把握できた気がします。

そこには「若林地区の沿岸に 200~300 の遺体」というテロップが流れていました。一度にこんなにも大勢の人が亡くなることなんてあり得るのか、その惨状を想像しただけで地震から 5 カ月になる今でも恐ろしさに震えてしまいます。私はその時初めて、この大震災が日本で起きたのだという実感、たくさんの日本人が亡くなってきつとこれからもっと増えてしまうだろうという恐怖、世紀末のような日本が 14 時 45 分以前の状態に戻る日は来るのかという不安を感じました。そして咄嗟に「東北に行きたい。助けに行かなくちゃ」と感じました。

あっという間に月日は経ち、8 月になりました。3 月 11 日の夜「被災地に行かなくちゃ」と突然の使命感に襲われてから 5 カ月も経ったというのに、私はまだ被災地に行けていません。てらこやの活動で何度も行く機会があったのに、アルバイトを休めなくて行けませんでした。

募金箱にもまだ一銭も入れていません。今もなお、家族を捜す人や家族の迎えを待つ人、すべてを失って嘆く人、将来が見えなくて自ら命を絶つ人…悲惨な状況に身を置く人は数えきれません。新聞に載っている震災による行方不明者数は減り、死者数は増え続けます。

これからもどんどん数は増えていくでしょう。被災者の心身のストレスや負担も半永久的に消えることはないでしょう。

それでも私はアルバイトを続け、何も考えずに爆睡したり、ゴキブリに怯えたり、遊びに行くことを企画したり、就活に悩んだり、くだらないことにイライラします。大地震のことや被災者のことはもうとっくに頭の片隅に追いやられています。あの夜、あんなに衝撃を受けて涙がこぼれたのに、被災地ではない東北に旅行に行きたいなあ、と考えることもあります。私はとても非情な人間です。あの日の感情も結局は偽善だったのかも知れません。

私の関心は、今はもう大震災から遠く離れてしまっています。でも、今も「被災地に行きたい」という想いが残っています。思えば「行きたくない、もう行かなくてもいい」と思ったことは一度もありません。今、日本中がひとつになってこの震災を乗り越えようと頑張る姿が、毎日伝えられています。それは私をはじめとする多くの日本人に、みんなががんばればきつと復興できるという希望を持たせてくれる何かがあるからだと思います。

それは過去の経験なのか、「信じる者は救われる」精神なのか分かりません。でも、こんなに多くの人が信じているのだから、東北や日本はいつか必ず復興すると思います。どんなに経っても被災者の悲しみは消えませんが、犠牲者の苦しみは癒えませんが、けれど被災地はもう前を向いて、未来に向かって歩き出しています。立ち止まらずに、でも決して忘れ

てはないのです。同じように被災地から遠い私たちも、いつも思っていることはできなくても、心のどこか片隅に被災地への想いが在り続けているのだと思います。それだけこの大震災が遺したものは大きいのです。この震災はまだ終わっていません。いつか終わるその日まで、信じ続けたいと思います。

### 震災後に必要なこと

早稲田大学社会科学部3年 奥山 恵梨香

「これは本当に同じ日本の光景なのだろうか」

これが、3月11日に私がテレビを点けて、初めて東北の惨状を目の当たりにした時に思ったことだった。

私はちょうど実家のある岡山に帰省していたため、全く揺れを感じることもなかった。「大きな地震があったらしい」という情報を耳にしても、常日頃から地震大国と言われる国だ、そこまでの大惨事にはなっていないだろうと思ってしまった自分をどうにかしてやりたい。

始業のため東京に戻るときにも親族にはかなり渋られ、ここ最近になっても電話をかければ話題に上るのは原爆問題や放射性物質のことが多い。

思えば私が小学生のころだったからもう10年近く前になるだろうか、その頃から都市伝説的に聞くことがちょくちょくあった「大

地震」が本当に起きることになるとは、全く想像していなかった。

阪神大震災も一応経験しているとも言えるが、実家付近はさほど揺れず、その上幼すぎたので全く記憶に残っていなかった。この震災が私にとって初めてといってもいいほどの衝撃を与えたと言える。そしてその3.11の震災から早くも5ヶ月が経過しようとしている。

震災以後、私の生活は変わったのだろうか？ そう聞かれると、そこまでの大きな変化は迎えていないような気がする。

東京へ戻ってきた直後こそ、買い占め騒動などで近所のスーパーから物が無くなったこともあったが、生活に困窮するほどだったかと問われればそうでもない。

また、現在でもいまだにマグニチュード6規模の余震が続くが、東京に戻ってきた直後より揺れに過敏にはなっているものの確実に「慣れてきている」ことを感じる。(それが決して良いこととは言えないのであろうが)

そこで私個人の意見だが、大規模な震災後、そして支援の続く今、比較的被害の少ない地域の私たちにできることは『つとめて普通の生活を送ること』ではないだろうか。

前述の必要以上の買い占めによる物資不足は、さらに人々の不安を煽った。しかし冷静になってよく見てみれば、実は元々家にストックしてあったもので十分に足りることが判明したというのもワイドショーで取り上げられていた。

またそれとは逆に、極端な節約生活に身を



置く人たちもいたことだろう。

現に、震災直後は少しの娯楽に対しても「不謹慎だ！」の声が上がるがあった。だが、だからといって全てを我慢してお金を使わない生活に切り替えては、本来の社会における経済活動が従来通り行われずに社会経済の停滞を招き、それはさらに自分たちの首を絞めてしまう結果となるのではないか。

震災後しばらくして、護国寺の前を通りかかったときにこんな言葉が書かれた紙が掲示されていた。

「奪い合えば、不足する。我慢すれば、足りる。譲り合えば、余る。」

この言葉に尽きるのではないかと思う。過敏になって必要のないものまで買いすぎることも、逆に必要以上の我慢をすることもない。

普通に、自分たちが困らない程度の生活を送って、そこからわずかにでも出た余裕を困っている人たちに譲ってみる。ひとりひとり、または各家庭から出た余裕はわずかでも、心がける人・家庭が増えれば支援は大きく膨らむのではないだろうか。

……これは結局、私自身が被災していない、いわば「幸せ者」の立場だからこそ言える戯言に近いものかもしれない。

しかし、少しでも心にとどめておくこと、そして少しでも心がけることで、結果は違ってくるのではないだろうか。そしてそれに加え、この大震災を忘れないことも重要で必要なことだろう。

今回で得た教訓を、未来へと活かしていかなければならない。

## 自然と価値観

早稲田大学教育学部4年 中野 正子

2011.3.11。地震の瞬間は自宅2階の部屋にいた。家全体が揺さぶられ、身の危険を感じた。小学校の時にやった起震車体験が目の前で現実には起きている感覚だった。隣の部屋から祖母の叫び声が聞こえた。その夜は余震が続き気になって眠れなかった。それから一週間は余震が頻繁に起こり、ジェットコースターに乗った後ふらふらして気持ち悪くなるのと同じような感覚、いわゆる地震酔いになった。

今回の震災で驚いたことは、震災の翌日からスーパーやコンビニの商品がみるみるうちになくなり、棚がすかすかになった光景を見たことだ。水、トイレトペーパー、米、カップ麺が地元のスーパーからはほぼ消えた。祖母は、戦争とオイルショックを経験しているからか家族の誰よりも落ち着いていた。

人は自然災害に対して無力である。普段、都会で暮らしていると人間は自然を意識しているかのような錯覚を覚える。けれども今回は、改めて自然の力の大きさ、怖さを感じる機会となった。

自然という思い浮かぶのは、出身幼稚園である。一言で紹介すると、環境も人の精神

も自然であふれている場所だ。例えば、動植物が豊富だった。黒猫二匹が園庭を自由に歩きまわり他にも様々な動物がいる。(ウサギ、鶏、亀など) 園内は平坦でなく、大きな土の山もある。裏庭には竹藪の森があり自由にたけのこを掘り木登りができた。近くには小さな畑がありサトイモなどを種まきや収穫した。人の精神面では、先生たちは皆おおらかだった。園児が水たまりで泥だらけになって遊ぶことは日常茶飯事だったが、怒られることはなかった。よくミミズやダンゴ虫を並べてままごとしていたが、誰も気持ちが悪いという人はいなかった。鶏の卵を手芸用の綿で温めて、ひながかえるのを待っていた時も先生は微笑みながら見守りだけだった。

そのような環境の中で、のびのびと時間を忘れて遊んだ記憶がある。勉強はほとんどしたことがない。けれども、幼稚園時代に野生に還ったかのように動植物と深く関わりながら遊んだ記憶は何にも代えがたい。楽しい感覚がまだ体のどこかに残っているのだろうか。この文章を書いている時もそうだが、幼稚園時代の話をする時は温かい気持ちになる。卒園後も小、中、高と幼稚園へ友人などと遊びに行った。高3の時には大学合格の報告に行った。園長先生が喜んでくれ、自著<sup>(註)</sup>を下さった。筆者にとって出身幼稚園はいつでもふと寄りたくなる、いつでも受け入れてくれる安心感のある場所である。つまり、柔軟な考え方と寛容がある場である。

今の日本は「完璧社会」の思想が蔓延しているような気がしてならない。筆者も失敗し

ないことが完璧なことだと高校時代まで感じてきてしまった。けれどもそれが変わったのは、大学を入り直した経験からである。一度つまずくと自分は失敗をしてしまったのだという不安感が進路変更をするまであった。物事のやり直しについて日本では制度としては整ってきているが、意識や世間体といった極めて複雑で何か見えない力がそれを阻んでいる気がする。一度社会のどこにも所属していない時期があったが、その時社会から疎外感を少し感じた。今となっては筆者と同じように学校を入り直す人、また社会人から学生に戻った人、人生で大きな方向転換をした人と複数出会ってやり直すことはありふれたものと分かった。つまずいても失敗を糧にしてやり直しがきくのだと考え方を大きく変えられる経験となった。価値観を変えることで物事は前進していけるのだと知った。

震災後、自然や環境、エネルギーの問題が見直されている。それと同時に人間の精神や価値観も見直す時がきていると考える。ボランティアを始めると、自分とは異なる考え方を持つ人や空間と出会う経験によって今まで持っていた既成概念を見直し、新しい価値観が創出されて前進できるのではないだろうか。そして今よりもっと多様な生き方が認められて柔軟な社会に近づくのではないだろうか。

今まで、ボランティアをする機会を作っただけだったが、今回の震災を受けて意識が向いてきた。これからも今まで持ってきた意識を塗り替えるような新しい価値観に出会いたい。それによって今よりも自分や他の人・こ

とに対して柔軟に考えられる人に近づいていきたい。

<参考文献>

井口佳子『幼児期を考える—ある園の生活より—』相川書房、2004.1

## 震災と共同体の可能性

早稲田大学人間科学部4年 味野 安紀子

### 個人主義と共同体主義

今回の東日本大震災を受けて、改めて失われつつある村落共同体の相互扶助の精神が見直されることになったのではないだろうか。

個人主義の国アメリカでは、ハリケーン・カトリーナ（2005年8月末、アメリカ南部を襲った大型ハリケーン。死者1800人、避難者約120万人。）によって壊滅的な被害を受けたルイジアナ州ニューオリンズの周辺地域で、当時、強盗や便乗値上げが多数起こったという。

その一方で、ハリケーン・カトリーナの何十倍も被害の大きかった東日本大震災では、そのような反社会的な行為はほとんど起こらず、むしろ助け合い、我慢し合いながら避難生活を送っていた。

この対照的な状況を生み出したのはなぜだろうか。それはおそらく、アメリカが個人主義の国であり、日本が共同体を重んじる国であることが関係しているだろう。

例えばアメリカは、人種の坩堝と言われるほど様々な民族、人種の人々が同じ地域に暮らしている。当然、文化や考え方も異なるため、「自分が助けてあげれば相手も助けてくれるだろう」という期待をし辛い。その結果、自分の身は自分で守ろうという発想になり、災害時に強盗や便乗値上げが多数発生したのではないだろうか。

一方、日本では、古くから村落共同体の繋がりが強く、共に助け合ったり我慢し合ったりしながら生産活動を行ったり、生活を共にしてきた歴史がある。そのような、相互扶助の精神が東北の地域では脈々と受け継がれてきたからこそ、今回のような大震災に見舞われた際にも秩序だった行動をとることができたのだろう。

### 共感の及ぶ範囲の広がり

今回の大震災では、強盗や便乗値上げが起こらなかっただけでなく、積極的に評価されるべき行動も多数見受けられた。それは、多くの人が被災地の人々のために何かしらの行動をとったということだ。

例えば、多くの人が現地へ足を運びボランティアに参加したり、義援金を寄付したり、物資を提供したりした。そのような動きは、国内に留まらず海外からも起こった。アメリカ等の先進国のみならず、アフガニスタンやバングラディッシュといった国からの支援もあった。

かつて、ジャン・ジャック・ルソーというフランスの哲学者は、このように言っていた。

「人道主義の精神は、世界全体に広げると薄まり、弱まってしまうようだ。私たちヨーロッパ人は日本で起きた災害に、ヨーロッパを襲った災害と同じだけの衝撃を受けるわけではない」

確かに、これはあなたがち間違いではない。しかし、必ずしもそうであるとは言えないことが、今回の大震災とそれに対する世界各国からの援助によって証明されたのではないだろうか。

近年、著しく通信技術が発達し、地球の裏側で起こっていることが、さも自分のすぐ傍で起こっているかのように感じられるようになった。それによって、人々の共感の範囲も文化や国境を越えたのだろう。

このように、通信技術の発達やグローバル化の流れの中で、共感の範囲を広げていくことによって、地球全体を一つの共同体と考えられるようになれば、国際的な不和をも緩和させることができるかもしれない。

### 3月11日以後をどう生きるか

ここまで、共同体に由来する助け合いの精神が、今回の東日本大震災のような災害の際に人々の支えになるということを主張してきた。

先にも述べた通り、日本では古来から村落共同体の中で相互扶助の関係を築きながら生活を営んできており、その精神が今なお受け継がれていた東北地方では、助け合い、我慢

し合うことで震災直後の最も厳しい時期を乗り越えた。

しかし、日本の歴史を振り返ってみると、科学技術の発展に伴い分業化が進むにつれて、共同体を形成して互いに助け合わなくても快適な生活が送れるようになってきた。また、村落共同体の負の側面、例えば生活に多くの制約が設けられる点などに嫌気がさした人々も多く、都会に移り住んだ後は、あえて共同体を形成しないようになった。

その結果、特に都市部では、地域の繋がりが絶たれ、隣の家には誰が住んでいるかも分からないような状況が蔓延することとなった。

もし今回のような大震災が東京直下を襲ったとしたら、果たしてどうなるだろうか。東北地方のように、地域の繋がりが強くないがために、いざという時に助け合うことができないかもしれない。隣の家でお年寄りが逃げ遅れていても気付いてあげられないかもしれない。

そう考えた時に、今まさに、鎌倉でこやのような地域の繋がりを生む活動の重要性を再認識する。子どもを中心として、世代を越えた地域の繋がりを普段から構築しておくことによって、今回のように、いざという時の心強い支えになるだろう。

今回の大震災を機に、昔ながらの村落共同体とはまた違つかたちで、地域の繋がりを再構築していく努力をしたい。